

# 立命館大学大学院 2018年度実施 入学試験 博士課程前期課程

## 文学研究科

### 人文学専攻・文化動態学専修

※2019年9月入学 入学試験は、筆記試験の実施がないため掲載していません

入試方式	実施月	コース	科目	
			専門科目	
			ページ	備考
一般入学試験	9月	高度専門	×	
	2月		P.1～	WEBのみ 一部非公開
社会人入学試験	9月	高度専門		
	2月			
外国人留学試験	9月	高度専門		
	2月			
学内進学入学試験	9月	高度専門		
学内進学入学試験 (大学院進学プログラム履修生対象)	2月	高度専門		
APU特別受入入学試験	9月	高度専門		

2019年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2019年2月16日

博士課程前期課程 人文学専攻  
文化動態学専修

「専門科目」

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること  
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない

## 文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学専攻 (文化動態学専修)	前期課程	専門科目	高度専門		

## 問題

以下の二つの<テキスト>と<イメージ>をよく読み、設問に答えなさい。

- 問1 下線部①における「愉快」さはどのようなことに由来すると考えられるか、私見を述べなさい。
- 問2 下線部②における「トポス」とはどのような概念か、その特徴について述べなさい。
- 問3 <イメージ>の内容からするならば、そのタイトル “The Formula of British Conquest” は、どのように日本語訳することができるだろう。邦訳を「」内に記した上で、そこに自らが込めたニュアンス、あるいはその翻訳に含み込めなかったニュアンスを補足説明しなさい。
- 問4 <テキスト1>と<テキスト2>から自分なりに論点を抽出し、それらを活用しながら<イメージ>に関する独自の解釈を展開しなさい。ただし、<イメージの参考資料>は必ずしも利用しなくともよい。

<テキスト1>

この問題は、著作権の関係上、公開していません

## 文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏名
人文学専攻 (文化動態学専修)	前期課程	専門科目	高度専門		

## &lt;テキスト2&gt;

コロンブスの『日誌』の大いなる逆説は、1492-3年の航海がヨーロッパとアメリカに対し持続的かつ破壊的な影響を及ぼしたものであり、いまだに人類の偉大な達成として祝賀されているにもかかわらず、その記録自体は、誤解と失敗と幻滅を語っているということである。なかんずく、アジアに到達していないこと、これはコロンブスにとって認めるにはあまりに大きな失敗であった。しかしさらに重要なのは、一連の小さな失敗である。

『日誌』の記述によれば、スペイン人たちは、ありとあらゆる目的と期待をもって到着し、迎えた先住民たちを質問攻めにした。記述の大部分は、コロンブスが先住民とかなり直接に意志疎通できたかのような印象を与えるが、実態はまったくそうではなかった。スペイン船に乗っていた唯一人の通訳ルイス・デ・トレスは、ヘブライ語、アラム語、そして若干のアラビア語を理解するがゆえに特別に選ばれた男だった。したがって、最初になんらかの意志疎通が成立したとは考えがたいのである。先住民はおそらく当惑するばかりで、訪問者をすみやかに追い出すのに最適と思われる身振り手振りを行ない、熱心に水平線を指さしたであろう。スペイン人たちは、尋ねた物が（それが何であれ）、すぐ近くにあることを知って喜び、これだけわかり合えれば最高だと思ったことだろう。到着から2カ月後の12月11日コロンブスはこう記入する。「日ごとにわれわれはインディオたちの言うことを理解し、彼らもわれわれの言うことを解するようになってきた。しかし誤解も多かった」。これはおおむね肯ける。しかし、その後の月日で意志疎通が改善されたという記述はほとんどない。ここで問題の10月から11月にかけて、コロンブスが提示するヨーロッパと原住民の対話なるものが、ヨーロッパ人の独話ではなかったといういかなる論拠もない。ラス・カサスは、1492年11月23日の記述について、考慮を要すると欄外注を付した。それは、コロンブスが「家」の意味の「ボーイオ」という言葉を島名と誤解していることについての注である。「このことは、提督がいかに彼らのことを理解していなかったかを示すものである」。しかしこの独話は、けっして単純であったり、いつも均質だったのではない。コロンブスが最初に示した懷疑は、ヨーロッパ的理性のつかのまのきらめきなどではなく、ヨーロッパの独話それ自体に内在する言説上の闘争の結果として読解されねばならない。

要するに、『日誌』の徴候的読解によって明らかになるのは、二つの言説のネットワークが存在していることである。それぞれの言説の概略は、キーワードによって把握することができる。それは、第一の言説では、「金」「カタイ(中国)」「大汗(Grand Khan)」「知性をもった兵士たち」「大きな建物」「商船」であり、第二の言説では、「金」「野蛮」「怪物性」「食人」である。大雑把に言えば、それぞれの言説は別々のテキストに起源をもち、第一の言説はマルコ・ポーロに、第二の言説はヘロドトスに遡ることができる。もう少し注意深く言うならば、それぞれ古典時代に遡ることができる一群のトポスとモチーフをもつ「オリент文明の言説」と「野蛮の言説」とでも言うべきものが存在する。ここで、第一の言説は経験的知識に基づき、第二の言説は心理的投射に基づくと言いたい誘惑に駆られるが、それは誤った二分法である。たしかに、ヨーロッパと極東の間で幾世紀にもわたって、断続的にせよ、交易が行なわれたという物質的現実があった。交易を求めて、あるいは交易の結果として、幾人かのヨーロッパ人が極東まで旅した。しかし、彼らの言葉が、「彼らが見たもの」の単純な反映だと思ったら大まちがいである。それゆえ、互いに区別できる二つの言説について述べることにしよう。まず、オリентについては、その富と力を語る一群のきらびやかな語句と言ひ回しがあつた。ヨーロッパは長年にわたって交易のために膨大な金銀を東方に送り続けたのだから当然だろう。マルコ・ポーロの報告は、これらのトポスを活用した文章の中でも最もよく知られているものである。他方、「野蛮の言説」は、ギリシャの「野蛮」な隣人を「調査」したヘロドトス以来、あまり変化しなかった。「野蛮」の場所は移動したが、アマゾン[女戦士]族、食人族(アントロポファガイ)、犬頭族の描写は、クセシアス、プリニウス、ソリヌス、その他の著作家においても変わらなかった。「野蛮の言説」の方が有力だったのは、それがテキストの再生産には依存せずに「他者性」を構成する通俗的な言葉を提供してきたからである。しかしコロンブスは、自分の航海を支持するものとして、テキスト上の権威を参照することができた。それは、ビエール・ダイーとアエネアス・シルヴィウス、そして『マルコ・ポーロ』として知られている。この『マルコ・ポーロ』は、そもそもフランス系ロマンス作家[ルスティクロ]によって書かれた『世界誌(Divisament dou Monde)』という本であり、それ自体が解きたい言説の編物(ネットワーク)なのである。

コロンブスの航海の最初の数週間、二つの言説の競合はあっても、『日誌』に目立った相克は現れない。この二つの言説の関係は、現在と未来の関係として表現されている。現在「野蛮の世界」を見ているが、この向こうには「カタイ」が見出されるだろう、というものである。しかし、言説の闘争には、二つの場がありうる。テキストの中に現前する意識的闘争と、テキストの中には不在という形でしか存在せず、それゆえその痕跡から再構成せねばならぬ無意識的闘争の二つである。意識的な闘争は、「マルコ・ポーロの言説」に由来する「大汗の兵士たち」という要素と、「ヘロドトスの言説」に由来する「人を食う野蛮人」という要素が、単一の記号すなわち「カニバルス」という言葉を取り合っているところに現われている。11月23日のコロンブスの動揺は、「カニバル」という言葉が、彼を迎えた先住民からはいつも「人食い」として説明されるのに、彼の心には「大汗(Gran Can)」を想起させてやまなかったという、理解の枠組みの問題なのである。よく似た音をもつ二つの言葉は、『日誌』のさまざまな箇所数行ほどの間隔で響き合っているが、1492年12月11日、ついに合致する。

彼らは知性のある種族に痛めつけられており、これらの島に住む者どもはすべてカニバを恐れているようだった。「それですでに述べたことを繰り返すことになりましたが、カニバとは、大汗の人々のことに違いありません。彼らは近くにおいて、船を所有しており、島の者どもを捕らえにやってくるのですが、捕らえられた者は帰ってきませんから、食べられてしまったと彼らは考えています」と提督は述べている。

ここに二つの Can は同一のものとされ、この決定的な同一化は過去に遡って適用される。そして食人者としての「カニバル」記号は、指示対象を失って、消え去らねばならない。

ただし、もちろんこの記号はけっして消え去らない。事はさほど簡単ではない。実際「カニバ」と「汗の人々」を同一視する主張は、「オリентの言説」の勝利どころか、その敗北のしるしである。というのも、音の類似という決定的な証拠は、あたかもそれが行動を導く力を失ったときに、テキストに持ち込まれたように思われるからである。

出典:ピーター・ヒューム(著)、岩尾 龍太郎ほか(訳)『征服の修辞学:ヨーロッパとカリブ海先住民, 1492-1797年』, 法政大学出版局, 1995年, pp.26-31. (ISBN:978-4588004582)

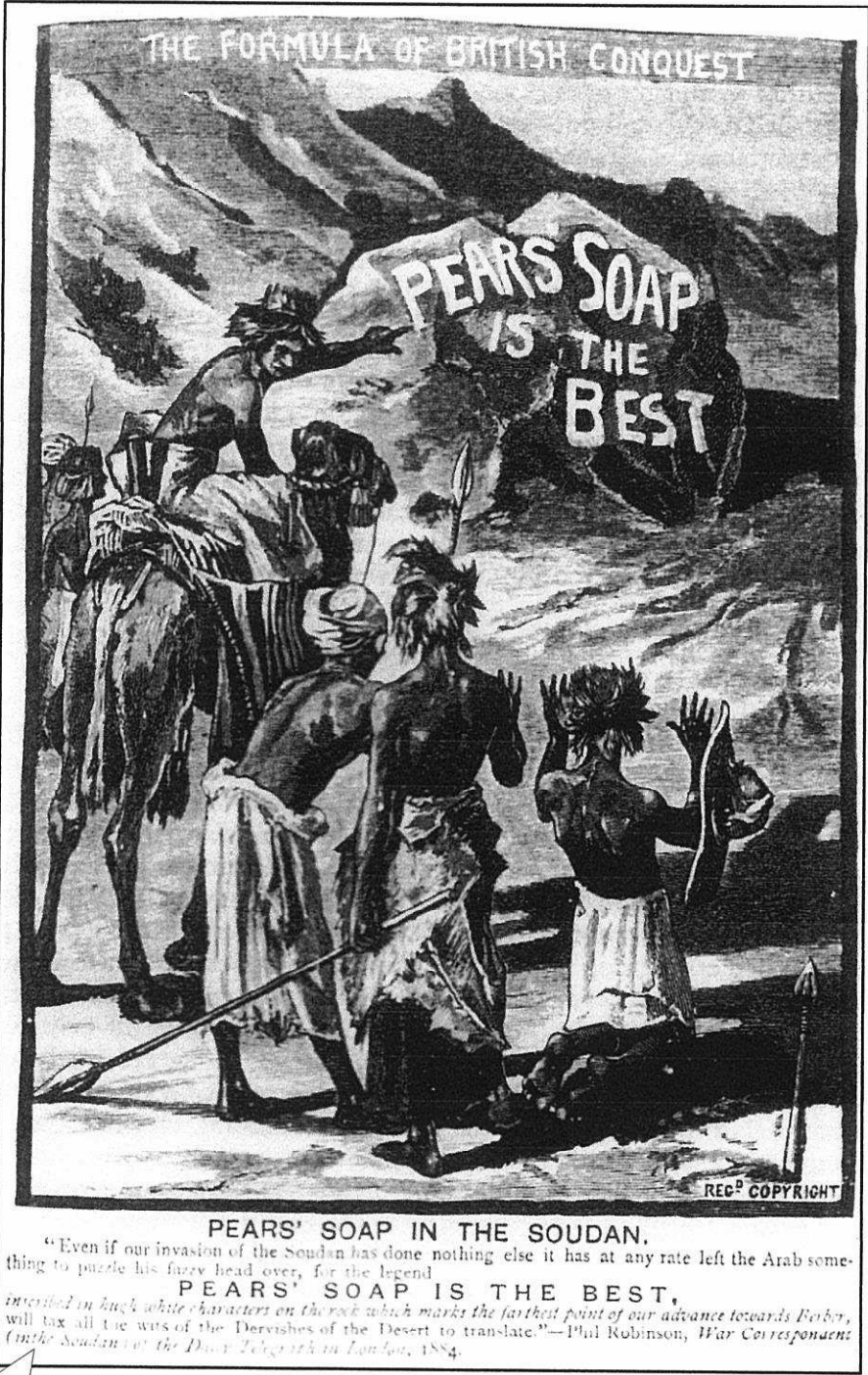
原著:Hulme, P. (1992). *Colonial Encounters*. London: Routledge.

権利者の許可を得て掲載

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学専攻 (文化動態学専修)	前期課程	専門科目	高度専門		

<イメージ> ‘Pears’ Soap in the Soudan’, Pears’ Soap advertisement, *The Graphic*, 30 July 1887



Q Pears’ Soap in the Soudan.  
“Even if our invasion of the Soudan has done nothing else it has at any rate left the Arab something to puzzle his fuzzy head over, for the legend  
Pears’ Soap is the Best,  
inscribed in huge white characters on the rock which marks the farthest point of our advance towards Berber, will tax all the wits of the Dervishes\* of the Desert to translate.”—Phil Robinson, *War Correspondent* (in the Soudan) of the *Daily Telegraph* in London, 1884.

\*dervise: イスラーム神秘主義の修行僧、托鉢僧

## 文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学専攻 (文化動態学専修)	前期課程	専門科目	高度専門		

## &lt;イメージの参考資料&gt;

This advertisement for Pears' Soap in the Sudan, if newspapers of the time are to be believed, represents an actual episode which took place. In May 1885, articles in the *Pall Mall Gazette*, *Life*, *Printing Times*, *Birmingham Daily Post*, *Bristol Mercury*, *Fireside News* and *British and Colonial Druggist* all describe how a huge advertisement for Pears' Soap could be found on a rock in the Sudan. As *The Pall Mall Gazette* described:

At Otao, about twenty miles from Suakin, on the Suakin and Berber Railway, stands a huge bunch of rocks about one hundred feet high, of somewhat conical form. Advantage is taken of the eminence of this rock for posting sentries; hence it is known as the 'Tower Rock'. On the face of this rock a huge advertisement, two hundred and fifty [sic] square, in letters of four and a half feet high, indicates that 'Pears Soap is the Best'.

Soldiers in the field apparently painted this message. The spreading of commodity culture, and the symbol of Pears as civiliser and cleanser, had moved beyond passive representation. Although Pears cannot be seen as playing an active role in the field, the fetishised product had begun to represent the ideals of British fighters to the extent that the name of Pears is used like the flag as a mark of conquest. On 22 August 1885, *Illustrated London News* even depicted an engraving of the scene. It is interesting that a suggestion for an advertisement on the subject was actually made at this time by a soldier named W. C. Burnett who served in Africa. He sent a sketch of the scene with his letter to Pears, although he wrote on the day after the engraving appeared in the *Illustrated London News*, from which he could easily have copied it.

In spite of what appears like journalistic jubilation at the event, it is hard to believe that this episode actually took place. It would have taken a lot of paint and a lot of organisation on the part of a group of soldiers to carry out such an act, which is presented as entirely spontaneous. All the newspapers also borrow their description of the scene from the *Pall Mall Gazette* — in some instances word for word. Yet was the whole episode, whether mythical or actual, constructed by Pears? If so, it was a marvellous publicity stunt and must have been set up for the press coverage it would elicit. The comments in the *Illustrated London News* suggest that it was an agent of Pears who carried out the action:

As for the illustration, copied from a photograph, it is proof that certain departments of English private enterprise, in the ubiquitous exercise of modern advertising ingenuity, continue to make their mark on the remotest scenes of warfare, and with character perhaps more enduring than the traces of our public policy in the Soudan.

## 【出典】

Copyright © Anandi Ramamurthy 2003

Ramamurthy, A. (2003). *Imperial Persuaders*. Manchester: Manchester University Press, pp.38-40.

Reproduced with permission of the Licensor through PLSclear.